

討 議

第 20 卷 第 6 號 昭和 9 年 6 月

鐵道線路下暗渠に及ぼす土壓及列車荷重

(第 19 卷第 6 號, 第 10 號及び第 20 卷 第 3 號所載)

會員 工學士 並 川 熊 次 郎

原著者島田氏の鄭重を極めた御挨拶に感動し、今回は一層忌憚無き愚見を陳べることにしますが、氏は、原著に於て採用された D 式が自働性が受働性が判然しないといはれるが、原著では懸案土柱左右兩側土體が D なる水平力と Df なる鉛直上向摩擦力を發現すると成つて居るその事自身が D の受働性たる由を示して居るではないですか。

これ等兩力の合成力は勿論斜上向ですから、これが自働性だとは到底考へられないでせう。まさか Df は受働性だが D は然らずとは辯ぜられますまい。この儀は、土柱全重の一部を左右の土體へ負擔させた御當人として當然承知して居られたのを、今更受働自働の區別が不明だなどいはれる氏の眞意が那邊に在るかを疑はざるを得ませぬ。

それも、該土柱の如き幅の限られた土體がその側面に於て發現する自働性土壓力の算定法の全然發表されて居なかつた原著御寄稿の際ならば兎に角、本誌第 19 卷第 3 號並に同第 10 號、即ち貴著に對する本題の討議と同席して、氏の爲には恰好な田村氏の卓説が堂々と發表されて在つたのですから、これを御覽ならなかつたのは不思議です。それとも氏は先進物質文明國人たる B 氏の説ならば、何等の詮議も無く、信仰的に信賴するが、同胞たる吾々の説は齒牙にだも懸けられ無いのですか。それ等の點が明かに成るまでは、今般發表せられた自餘の討議を試みるも無意味だとして、今回は差控へることにします。不惡御諒察を乞ふ。

(この討議に對して著者島田昇二君よりは差當り御教示に預る事なき故を以て討議の御寄稿がなかつた。)